

2015. 1. 15

No.187

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

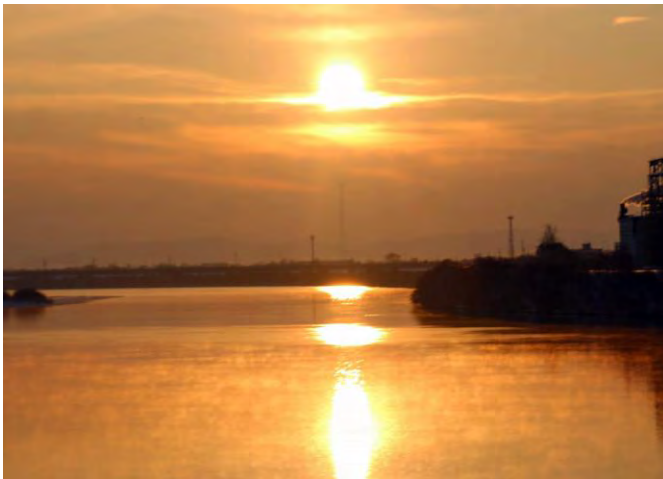
郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



## 2015年元旦、夫婦そろって空を見上げた 初日の出とオリオンの大星雲



あけましておめでとうございます。私が住む野幌は穏やかな新年を迎えました。みなさまはいかがお過ごしですか？

昨年は、集団的自衛権の行使容認や、特定秘密保護法施行など大きく「戦争できる国」に舵を切った年でした。政府の右傾化に拍車がかかる中で、多くの市民が憲法を守れと怒りの声をあげました。

反原発を中心に社会問題に関心は持ちつつも、今まではなんとか時間を作って登山をしていた私ですが、昨年7月にアウシュヴィッツとプラハを訪ねる旅（184号に詳細）をしてから、人権と平和について深く考えるようになりました。そういう時に20年以上も前に従軍慰安婦の金学順さんの証言を記事にした元朝日新聞記者へのバッシングが、週刊誌の記事をきっかけに始まります。植村さんが勤務する北星学園大学への攻撃が本格化しました。その概要についてはここでは書きませんが、友人から「脅迫にマケルナと北星に応援メールを送ってほしい」という呼びかけがあり、とても他人事とは思えませんでした。多くの友人が立ち上がる中、山に登れなくても、自分にできる支援や運動をしようと思いました。

次ページで、支援運動に奮闘された新西孝司さんの寄稿を掲載しました。

また、数々の名作で私たちの心に深く刻まれた亡き

高倉健さんと「戦争はしてはならない」と発言した菅原文太さんについては福原正和さんに寄稿していただきました。

元旦は、石狩大橋から初日の

出を見ました。夜は年末から夫が計画した「星の観測会」を自宅庭で行いました。月齢13の月、オリオンの大星雲（M42ふくろうが羽を広げたような星雲）、スバル、シリウスは七色に輝き宝石のようでした。木星が左隣の屋根の上から昇ってきましたが、シーイングが悪く縞模様が鮮明に見えなかったのが残念でした。ご近所の友人がいらしてくださり、「お正月の感動でした。プラネタリウムでしかみれないスターたちを野幌の空で観れた！今でも☆彗の余韻に浸っています」というメールを頂き、夫も私も嬉しかったです。

星に関わらず、私もよく空を見上げます。雲に呼びかける詩人に山村暮鳥がいますね。

「雲もまた自分のやうだ/自分のやうに/すっかり途方にくれてゐるのだ/あまりにあまりにひろすぎる涯のない蒼空なので/おう老子よ/こんなときだ/にこにことして/ひょつこりとできませんか（「ある時」）」

雲は私です。頼りなく、どこまで進めるのか不安ですが、今年も「銀河通信」を書き続けたいと思います。どうぞご愛読お願いします。



1.3 小樽運河で



## 『北星・草の根の闘いより』新西孝司

「北星平和宣言支持・厚別区民の会」代表

昨年の北星学園大学をめぐる闘いは私達の戦後70年の歩みに新たな一頁を加えました。この闘いは、世論に影響力をもつ「有名人」と「メディア」、それに「無名の草の根市民達」が、見事なコラボレーション（提携）で、互いの自主性を尊重しつつ、整然と進められました。海外でも米・英・独・韓国などの有力紙が日本の右傾化の懸念を報じるなど、安倍政権下で跋扈する歴史修正派との闘いに、新しい展開が見られました。この闘いの全般的総括が提起されていますが、ここでは、この闘いの一翼を担った「厚別区民の会」の活動について報告します。

「区民の会」結成の発表は9月30日。3月5日に植村さんから神戸松蔭女子学院大の件を聞いてから半年後です。5月以降、激しくなった右翼からの攻撃に対し、2011年から自宅で続



けていた、日本・アジアの近現代史を学ぶ『歴史カフェ・青葉（20名）』の皆さんと、北星・植村激励メール・手紙を送る活動を始めました。量的には圧倒的少数で苦しい状況が続きましたが、6月25日に大きな転機が訪れました。道新記者との出会いです（経過略）。その後曲折を経て、『週刊金曜日』9月19日号が攻撃の全容をメディアとして初めて報道しこれが全国的な「マケルナ会」発足への起点となりました。「厚別区民の会」は「マケルナ会」参加と共に1995年『北星学園平和宣言』で《\*人権尊重の教育 \*アジアへの戦争責任痛感 \*不十分な戦後の歩みを反省 \*平和をつくる学園として歩む》の決意を表明・実践している北星学園は、世界に誇る「地域の宝」と確信。

学園・大学・平和宣言を支持する署名運動を始めました。予想をこえる協力とスピードで、署名数は12月初旬までに1184筆に達しました。年が明けてからも、見知らぬ方から20筆の署名が郵送されて来ました。不自由な体をおして50筆以上集めた年配の女性、署名用紙を取りに来て郵送してくれた北星大卒業生、所属する団体に呼びかけて、郵送された方々、日曜日の集會会場提供を申し出た介護施設の長など、会員以外からも様々な協力の動きがありました。昨年知り合った「かえりみる日本近代史」の著者、東大名譽教授・玖村敦彦さん（西区在住）は私達の活動を聞き、北星大学々長に3度、理事長はじめ全理事19名に、丁寧な要請の手紙を送ってくれました。

このような市民運動を、初めて経験した「歴史カフェ・青葉」の女性会員が、雇用継続の報を聞いて大きな声を挙げました。「先生、私達は今、歴史の中に生きて、活動しているんですね！」

北星学園大学は脅迫には、簡単に屈服しなくなりました。しかし、安倍さんはフランスなどへのテロは非難しても、日本国内のテロ予告や脅迫、ヘイトスピーチには非難も取締りもしません。闘いはまだ続くでしょう。頑張りましょう。2015.1.10

## 平和・友好の大切さを伝える2人の俳優がこの国から消えた

2014年11月10日高倉健（83歳）と、28日菅原文太（81歳）が相次いで亡くなった。ともにやくざ映画で一世を風靡したが、その実像は知的で心優しい2人であった。

健さんはやくざ映画を自ら離れた後、北海道を舞台にした多くの映画に出演した。『幸福の黄色いハンカチ』『鉄道員（ぽっぽや）』では映画撮影時お世話になった地元の女性たちと晩年まで交流し、南富良野町幾寅婦人会長は「いつもご丁寧な礼状を頂いていました」と述べている。

健さんはどんな人にも優しく心遣いし、また厳しく自分を律した人だった。自分が出ない撮影現場にも立ち会い、「スタッフががんばっているのに自分が楽をするわけにはいかない」とずっと立っていたことは有名な話。

健さんの母親は元教師で厳しく躰けられたという。任侠映画の立姿のポスターを見て、母親から「あの子、まだあかぎれ切らして、絆創膏貼っとるべい」と言われ、「見つけたのはおふくろだけでした。（中略）ありがたいですよ、母親って」と自著「あなたに褒められたくて」に書いている。



健さんは中国で圧倒的な人気がある。それは文化大革命が終わり、外国からの映画が中国で見られるようになった70年代末、日本から最

チャン・イーモウ監督と

初に入ったのが健さん主演の『君よ憤怒の河を渉れ』だった。無実の罪を着せられ追われる役で、文化大革命下政治の混乱や冤罪に苦しめられた中国人に、熱狂的に迎えられ高倉健は圧倒的な人気俳優となった。名監督チャン・イーモウもファンの一人だった。

彼は生前次に映画を撮るとしたらと聞かれ、「中国で撮りたいですね」とも答えている。自分で願って出演した映画『ホタル』では、戦死した特攻隊の上官（朝鮮出身）の故郷韓国の村を訪ねる場面で、自ら提案し遺族の前で「アリラン」を歌うシーンを入れたと言われている。彼が中国・韓国との友好に果たした役割は大きい。

菅原文太は（何故かさん付けは似合わない）『仁義なき戦い』『トラック野郎』後はほとんど映画には出演せず、山梨県で有機農業をしながら反



戦・憲法9条改悪反対、原発反対の意見表明と支援活動を積極的に行った。

死の直前11月1日体調が悪い中、奥様に支えられ沖縄県知事選で基地反対候補の決起集會に馳

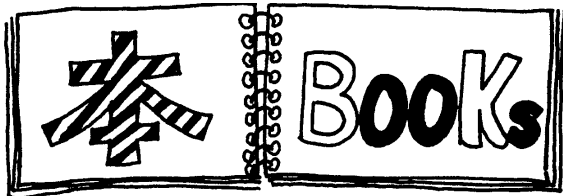
せ参じ「政治の役割は二つあります、国民を飢えさせないこと、そして最も大事なのは戦争をしないこと」「沖縄の海も山も風も・・・そこに住んでいる人たちのものです」と話し、映画『仁義なき戦い』のセリフを使い、「仲井眞さん、弾はまだ一発残ってるがよ」と訴え、聴衆を沸かせた。死の直前まで反戦平和に命を燃やし尽くした映像に私は泣けた。YouTube視聴を是非。

高倉健の追悼番組は沢山作られたが、菅原文太の晩年の活動に触れた報道は規制されたのかほとんどなく残念。

2人に共通するのは戦争を経験した世代として、戦争を憎み平和の大事さを訴え、隣国と平和友好を願う姿勢。心からご冥福を祈ります。

(福原正和・医師、銀河通信読者)

福原先生は、私の民医連在職中の同僚であり長い友人です。イギリスのケン・ローチ監督や、ポーランドのアンジェイ・ワイダ監督などの素晴らしい作品を紹介していただき、以来すっかり映画にはまりました。



朝日新聞  
安倍政権の  
核心  
抵抗の  
拠点から

抵抗の拠点から  
朝日新聞「慰安婦報道」の核心

青木理著  
講談社 1400円＋税  
バッシングにさらされた当事者である元朝日記者の植村隆さんや

市川速水さん、若宮啓文さん、本多勝一さんらを直撃し、それがいかに捏造やでっち上げであったかを丹念な取材で解き明かしています。

読み進むうちに明らかに安倍政権と右派メディアによる歴史修正主義の策謀が見えてきます。

植村さんは「僕は虐げられている側というか、人権を侵害されている人たちの側から発信したいというのがあった」と述べています。ネットの書き込みに触れて「自分にだけならまだしも高校生の娘に『売国奴のガキ』とか『自殺するまで追い込むしかない』とか書いているのもあってね。ひどいよ。これはひどいよ」と語る場面。人を傷つけて平気でいられる神経に怒りで震えました。青木さんは、「このようなことをする連中は真性のクズだ」「匿名という壁の陰に隠れ、ネットに下劣で愚劣な書き込みを繰り返すような人間に、言論や表現の自由という崇高な権利で守られるべき正義は一ミリたりともない」と断じ、青木さんも元記者らしい弱者の立場にたつての発言が嬉しい。

朝日新聞を長年愛読してきました。吉田証言の誤りを認めたのが遅すぎたにしても、その後の紙面に期待していました。「慰安婦」問題を徹底的に深く

追及することを。せめて植村さんの記事に捏造がなかったことをもう少し大きく取り上げて欲しかったです。機会を逸したとはいえ、是非書いて欲しいと思います。

青木さんは聞きにくいことを単刀直入に聞き、植村さんをはじめとする朝日関係者が率直に答えていて、さまざまな疑問が氷解しました。

お勧めです。



## ナツェラットの男

山浦玄嗣著

ふねうま社 2300円＋税

「ナツェラット」はヘブライ語で「ナザレ」のこと。ナザレの男イエシュ（イエス）の物語です。

福音書にあるイエシュ（イエス）の言行や言い伝えの物語を、そこに居合わせたであろう人物に語らせるという形式をとっています。聖書中にある様々な場面に立ち会った人達が証言するという形で、イエスと、イエスに惚れ込んで行動を共にした十二使徒、そしてイエスに関わった人々のその当時の情景が目に見えて来るような雰囲気活き活きと語られます。

私はクリスチャンではないので（でも関心はあります）イエスの物語という予備知識なしに読みました。作家の伊藤比呂美さんが絶賛。ドゥマゴ文学賞を受賞しています。

イエシュの風貌はこんな具合。「泥臭いナツェラットの山里の男だった。ろくに櫛も入れてないボサボサ頭、日に焼けた浅黒い肌、粗末な衣服にキラキラと輝く愛想のいい両の目」と表現。人間臭いイエスに惹きこまれます。

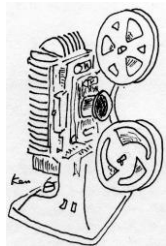
登場するのは、物語の順に、ベト・レハムの百姓、イエシュの師匠（ラビ）、宿屋の亭主、弟子シモン、五人の亭主を持った女、鬼千匹に取りつかれた兄を持つ娘、弟子ユダ、弟子ヨハナン、泥棒、弟子の女、ミグダルのミリアムなど。誰一人として悪人はいません。著者が読み解く弟子たちは欠点は多いけれど、どことなくユーモアがあります。

「おれたちはみんな神さまに造っていただいた兄弟なのに、自分だけが特別で、お前さんたちは犬畜生だといつらは思いこんでいるんだ。ごめんな。神さまのおめぐみは限りのないものだ。隔てのないものだ。どんな子供だって、かわいくない親などあろうはずがないじゃないか。神さまはお前さんたちだってかわいくてならないのだ。（略）お前さんの娘を一人治してやると、その代わりにイスラエル人の病人が一人死ぬか。そんなことあるわけないさ。神さまのおめぐみはそんなけちくさいものじゃないんだ」と語り、著者のイエシュへの限りない共感があふれていて一番好きな場面です。

ユダは裏切り者ではなかったという視点で描かれていたのも面白かったです。

いのちが生まれる聖地  
グチャン女性は語る

会田民穂監督



1月10日、映画上  
映と講演会が開かれ  
ました。小さな会場  
が50人を超える人  
たちでいっぱいになり

ました。主催は「とどけ太陽の会」の林心平さん。

グチャン民族、カリブー、先住民としての生き方、そしてこの聖地をグチャン女性の視点から描きます。そして、世界中の人々に、この聖地を一緒に守っていくことを呼びかけます。監督は会田民穂さん。（右写真）



アラスカ北東部に位置する広大な野生生物保護区。ここの北極海沿岸はカリブー（トナカイ）が、子を産み育てる場所となっています。カリブーを糧とし、何千年も生きてきた先住民族グチャンはここを、「いのちが生まれる聖地」と呼び、昔から近寄ることもなく厳重に保護してきました。

今、この地が石油開発の危機にさらされています。グチャン女性たちは、この聖地を守るために、声をあげ保護活動をしています。大地と共に生きてきたグチャン女性が美しい。

私は、反原発の運動と重ねて観ました。

会田さんの講演で先住民のおかれた状況がよく分かりました。環境問題であると同時に人権問題でもあるのです。

2014年ボストン近郊で行われたアースポート映画祭では、観客が選ぶ最優秀映画賞を受賞しています。



結城幸司さんが函館の廃棄物問題に焦点をあてたアイヌアニメ「七五郎沢の狐」について話され、福本昌二さんとのライブ「魔人にすり足」「トーキトラン」もすてきでした。小野有五さんによるフランス語でのアイヌ神謡集の一節の朗読もあり豊かな時間を過ごさせて頂きました。

（写真上左から結城幸司さん、福本昌二さん、小野有五さん、右写真は主催者の林心平さん）



圧殺の海—沖繩・辺野古

藤本幸久・影山あさ子監督



2014年7月1日  
辺野古の新基地建設が  
着工されました。安倍  
首相が集団的自衛権の  
行使容認を決定した日  
でした。

沖縄・辺野古への米軍基地移設に抵抗を続ける人たちの目線で撮影された、ドキュメンタリー映画です。昨年12月25日に上映されました。

巡視船やゴムボート、特殊警備艇、警戒船など、最大80隻にもなる船で埋め尽くされた、辺野古の海。反対する人たちを力強く抑え込みながら、有無を云わさず工事をすすめる日本政府。海で、基地のゲート前で、毎日、激しい攻防が続けられていますが、影山さんは「マスコミの取材はほとんどなく必死で抵抗している人々のことは伝えられない」と言います。

カヌーで海上保安庁の船に近づき、抗議する人のヘルメットにカメラを付けて、海上保安庁がどんなひどいことをするかつぶさに撮影しています。県民やマスコミの目が届かない海の上で海上保安庁の職員が5、6人がかりで1人の住民を抑え込もうとする様子に怒りを禁じ得ませんでした。まさに命がけで、辺野古に反対する姿がありました。炎天下の日中も、台風前の雨の中も、ゲート前に座り続ける人びと。両手を広げて工事用のトラックの前に立つおじいやおばあちが映し出されます。沖縄・辺野古を軍事基地にしてはならないと強く訴えるドキュメンタリーでした。

私は抵抗する人々の声や生活も是非撮ってほしかったです。激しい攻防シーンの連続で上映中、途中で退席した方がいました。

つい先日、1月11日に辺野古の米軍キャンプ・シュワブにミキサー車など15台以上が入り、ゲート前で抗議行動をしていた男性が逮捕されました。非暴力を貫いていますがたまたま持っていたペットボトルが警備員に当たったことが暴力とされたようです。

昨年11月、沖縄県民は、基地建設NOを掲げる翁長雄志さんを県知事に選びました。政府は沖縄の民意を圧殺してはならないと思います。

2014年「第88回キネマ旬報ベスト・テン」が8日、発表され、文化映画ベスト・テンの7位に、ドキュメンタリー「圧殺の海—沖繩・辺野古」が選ばれました。

私たちの未来の行方が、封じられ、圧殺される前に、無関心の壁に一穴をあけたいとの思いが伝わってきます。

今回の通信では紹介しきれませんでした。「ストックホルムでワルツを」で流れるゆったりしたジャズがすてきでした。また1999年のラブコメディ「ノッティングヒルの恋人」の音楽、シャルル・アズナヴール「忘れじの面影」が心に響きました。（み）

## サンバ

フランス オリヴィエ・ナカシュ監督  
エリック・トレダノ監督



障害がある大富豪と、黒人青年の交流を描いた「最強の心たり」のオリヴィエ・ナカシュ監督とエリック・トレダノ監督、主演のオマール・シーによる次作が

「サンバ」です。

不法移民のサンバ（シー）と燃え尽き症候群のキャリアウーマン・アリス（シャルロット・ゲンズブール）。生活も精神も不安定な者同士が人種を超えてつながり、生きる意味を取り戻していく物語。

最初のシーン。結婚披露宴会場の調理場で残飯の片づけをするサンバ。社会の底辺で働く移民労働者の姿を捉えます。

皿洗いから料理人に昇格したにもかかわらず、国外退去命令を受けたサンバが、入れられた収容所で休職して移民支援団体のボランティアをしているアリスと出会います。

収容所は出たものの不法滞在者として日雇いの仕事を転々とします。セネガルにはサンバの仕送りを頼みにしている貧しい家族がいます。フランスで暮らす不法移民の実態がリアルに描き出されます。

厳しい現状を見せつつ、素朴で笑顔が印象的なサンバが、情緒不安定なアリスや移民支援のボランティアらと心通わせ踊るシーンが良かったです。アリスがサンバのユーモアと笑顔で、変わっていきます。何といってもサンバが魅力的です。

二人の監督は移民排斥の右派の台頭で、移民が生きにくくなっていることを憂慮。フランスは多様な人種や移民などが暮らしています。そういう人々にも歩み寄り、耳を傾け、共に生きていこうと訴えます。ユーモアや笑顔も忘れずに。監督の社会と人間に向ける温かいまなざしに共感し胸にしみました。

今年観た最初の映画ながら一押しです。

映画とは直接には関係はありませんが、先日、フランスでイスラム過激派の新聞社襲撃事件がありました。言論の自由を守るのはいうまでもないですがイスラム教徒や移民を排斥することに繋がってはならないと思います。

## ロゼッタ

ベルギー リュック・ダルデンヌ監督  
ジャン＝ピエール・ダルデンヌ監督

99年のカンヌ国際



映画祭でパルムドール賞と、主演女優賞をダブル受賞した秀作ドラマ。

現代社会が抱える失業問題を背景にひとりの少女ロゼッタの複雑な心理を描き出す。主役のエミリー・デュケンヌの鬼気迫る演技と手持ちカメラによる

映像がまるでドキュメンタリーのように。音楽もありません。孤立無援の少女の孤独。不屈の気迫に圧倒されました。

映画が終わりタイトルバックとなっても音楽が流れないほどの徹底振りでした。映画音楽が印象に残ったりしますから、相当の自信がなければできないですね。

## ヨコハマメリー

中村高寛監督



白塗りの化粧に全身白すくめという、特異な姿で注目を集めた伝説の娼婦“ハマのメリーさん”をめぐる

ドキュメンタリー。90年代に突然姿を消し横浜の都市伝説となっていたが、たくさんの証言者のインタビューで構成されています。周辺住民がさまざまな援助をしたことが語られます。メリーさんを何くれとなく世話したシャンソン歌手の永登元次郎さんが、がんで余命いくばくもないなかで魂を振り絞って歌うラストシーンが素晴らしく感動しました。

今の時代ならメリーさんは排除されていたのではないのでしょうか？

## バンクーバーの朝日

石井裕也監督

石井監督の「舟を編む」は人物描写がとても丁寧ですからファンになりました。

今回は1914～41年、戦前のカナダで活躍し、2003年にカナダ野球殿堂入りを果たした、日系移民の野球チーム「バンクーバー朝日」の実話を映画化した作品です。

カナダに渡った日本人を待ち受けていたのは、過酷な肉体労働と低賃金、理不尽な人種差別の現実でした。

日本人街に誕生した野球チーム「バンクーバー朝日」は、体格で上回る白人チーム相手に負け続け、万年リーグ最下位。ある年、キャプテンに就いたレジー笠原は、偶然ボールがバットに当たって出塁できたことをきっかけに、バントと盗塁を多用するプレースタイルを思いつく。その大胆な戦法は「頭脳野球」と呼ばれ、同時にフェアプレーの精神でひたむきに戦い抜く彼らの姿は、日系移民たちを勇気づけ、白人社会からも賞賛と人気を勝ち取っていきます。貧しく虐げられてきた日系一世の希望の星になります。

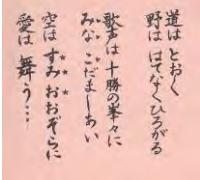
太平洋戦争の勃発で、財産は没収。チームも消滅します。でも「朝日」の活躍は、虐げられてきた移民一世にとって、どれほど嬉しく誇らしいことだったかと胸が熱くなりました。



日高の自然と『ヌタプカムシペ』が結んで結婚30周年を迎えました。



1月13日、私たちは結婚30周年を迎えました。記念日はいつもは通過点にすぎませんでしたが、30年に感慨深い思いが湧き上がります。札幌での新たな職場や子育て、夫の病気等暴風雨もあったなあと思ひ出します。結婚当時の新



鮮な気持ちを忘れずこれから夫婦で歩んでいきます。

結婚前までは旭川医大附属病院で臨床検査技師として働かたわら、「大雪と石狩の自然を守る会」で自

保護の市民運動を10年近くし、会の機関紙『ヌタプカムシペ』の編集をしていました。夫は札幌で理科の中学教師（当時は北辰中学校勤務）で、1984年8月、日高横断道路に反対する現地調査に参加していたのです。自然保護には無縁の人でしたが、日高の自然を知って授業にも生かしたいと思ったのが動機でした。たまたま持ち合わせていた機関紙『ヌタプカムシペ』を「読んでみませんか？」と手渡したのが縁です。

30年ぶりに結婚式のしおりを引っ張り出してきました。巻頭文に二人の名前が入っていて、どこまでもまっすぐにのびる一本の道がこれからの人生を象徴しているかのようです。（写真上・30年前の私たち）

「銀河通信」の原点が「大雪と石狩の自然を守る会」にあったことを、お祝いのメッセージから、改めて知りました。寺島一男さんの文章を抜粋してご紹介します。（ほめ言葉が面はゆいです）

「守る会」での情熱を今後とも

吹雪の夜、人の集まらなかった例会に、突如飛び込んできた時のみなちゃんの顔が忘れられない。あのはつらつとした目の輝きは10年近くたった今でも、少しも変わっていない。いつも心を燃やし続けてきたからに違いない。あるいは生来のロマンチストであるからかもしれない。

行動力があって、仕事の出来る人だから、いつの間にか守る会の大きな柱になってしまった。とりわけ守る会の看板ともいえる機関紙の評価は、彼女の腕におうところが多い。編集の仕方、記事には、彼女の非凡な才能がよくあらわれている。機関紙を手にとると、彼女の「編集後記」と「本の紹介」に真っ先に目がいくというのは私だけではあるまい。本格的にこの種の仕事をすると、素晴らしい仕事をする人だと思う。

なんといってもみなちゃんの魅力は、その感性の豊かさにある。センスのよさもここから出てくるのだろうか、などと思う。彼女は良く読書する。好奇心旺盛にしてどこへでも(?) 出かける。人ともよく語り、飲む?あまり世の常識を頼りとせず、人間として発想し行動する生き方をしてきたからだと思う。

彼女は一見すると、子供のように単純で、純真で、お人よしのところがある。二見以上すると、そこには彫りの深さや、人間味豊かなひだを発見する。おそらく彼女は、何事にも裸でぶつかり、裸で行動してきた人なのだと思う。

自然を守ってのこの10年近くの活動は、みなちゃんにとって、闘いの毎日ではなかったか、青春のすべてではなかったか、と思う程すばらしかった。この情熱に励まされ、支えられた仲間も決して少なくない。いつまでもこの心意気を忘れず今度は二人のすばらしい人生をつくりあげてください。

(寺島一男・大雪と石狩の自然を守る会代表)

「大雪と石狩の自然を守る会」との出会いがなかったら、「銀河通信」の発行はなかったと思います。誰一人友人がいない札幌で、しっかり生きていることを守る会の仲間へ伝えて始めてのがこの通信でしたから。さまざまな市民運動に首をつっこむのは、当時と変わっていないですね。

先日も友人から「200号まで書いてよ」と言われて、「やれるかな?」から「200号めざす」の決意に変わりました。寺島さん、とてもすてきなメッセージをありがとうございます。(み)



1. 13結婚記念日の澄生とみな子

版画「長岩城跡に行く」福岡県田川市の伊藤久次郎さんの賀状  
お二人の了解を得て掲載しました。



「ユルタと星空」横浜市の西田進さんの賀状  
ユルタはテュルク語で遊牧民の移動式住居のこと。

購読料をありがとうございます(敬称略)  
2014.12.27~2015.1.12

佐々木純一(雨竜町)川嶋新太郎(台東区)ご子息の川嶋朗さん著書「医者が教える人が死ぬときに後悔する34のリスト」も。三上妙子(札幌市)高野ケイ(札幌市)伊藤泰弘(札幌市)北嶋節子(横浜市)著書「崖の下」「とばない鳩」「月虹」3部作

合計8,000円は、印刷と送料に使わせて頂きます。また著書は次号で紹介できたらと思っています。ありがとうございます。

今年初めての通信です。郵送希望の方は郵便振替「銀河通信」02740-7-56535に6号分1000円のお振り込みをお願いします。webに切り替える方もお知らせください。